

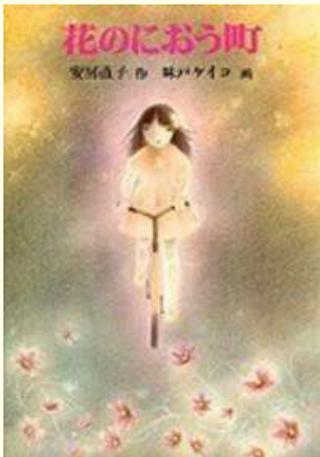
蔵書検索とキンモクセイ ～読書の秋に寄せて～

今年の名古屋の残暑は十月になっても厳しく、いつになったら過ごしやすい秋になるのかと嘆きたくするような日々が続きました。しかし、そのような中でも、いつしか学内では、「この季節がちゃんときましたよ」とでもいうようにキンモクセイが香りはじめ、季節の移ろいを感じられたことに幾分ほっとしたものです。

我が家の庭のキンモクセイも、地植えにして十数年、メジロが巣を作ったこともあるくらいに枝葉が繁り、今年も沢山の花をつけ、その香りで一帯は秋の空気に包まれました。

キンモクセイ、といえば、小学生の頃から愛読している一冊の本があります。安房直子著『花のにおう町』（岩崎書店/1983年）という童話集です。表紙には、自転車に乗ったひとりの女の子。夕暮れどきでしょうか、キンモクセイの香る季節の中を、髪をなびかせ、こちらへ向かって自転車でまっすぐすすんでくる様子。手前にはコスモスの花がゆれています。りんとしていながらも淡く幻想的な雰囲気を持ったその画は、味戸ケイコさんの手によるもので、表紙も挿画も、読むたびに、この童話集の世界に、このうえなく似つかわしく感じられます。

表題作の「花のにおう町」は、毎年キンモクセイが香りはじめると、必ず思い出すお話です。冒頭をご紹介します。



『花のにおう町』

安房直子/岩崎書店/1983年

（また、あの自転車だ）

と、信は思いました。

このごろ、ほんとうに、よく見るのです。ハンドルも、ペダルも、荷台も、ベルまでが黄色っぽいオレンジ色で、そこに、信と同じくらいの女の子が、乗っているすがたを。

（「花のにおう町」本文より）

主人公の少年「信」は、町でオレンジ色の自転車に乗ったかわいらしい少女を、何人も見かけるようになります。けれど、信の他には誰も、その少女たちを見たことがないのです。信が、この「オレンジ色の自転車」を最初に見つけたのは秋のはじめでした。

空が、とても青く、高くなって、風が、さらりとかわいてきて、そして、なきたくなるようなあまい花のにおいが、あたりにたちこめた夕方のごとでした。

ああ、これは、なんのにおいだったかな、と、信は考えながら歩いていました。胸のあたりが、あったかく、くすぐられるみたいなそのにおいを、信は、よくおぼえていたのです。（中略）

（ちっちゃいときから、そうだったんだ。秋になると、このにおいがしてきて、胸のなかが、バイオリンみたいな感じになるんだ……）

信は、赤んぼのときからこのにおいを知っていたと思いました。このとき、

「こんにちは」

信の左側を、すいと、一台の自転車が追いぬいていったのです。（「花のにおう町」本文より）

オレンジ色の自転車は、日に日にふえてゆき、そのたびに信のころはあの花のにおいでいっぱいになり、自転車のあとを追いかけてみたくなります。そして自分も自転車でおつかいにいったある夕方、「きょうこそ、あとをつけてやろう」と信は思い、女の子たちのあとを追っていくのですが……というお話です。

キンモクセイの花が咲いたことを、花の姿よりもまずその香りから知ることは、誰しも経験があるのではないのでしょうか。このお話はそういったキンモクセイの特徴と秋の郷愁が香り豊かに描かれたファンタジー。作品の随所に見られる、「胸のなかのバイオリン」という表現が印象的です。

童話集『花のにおう町』には、ほかに「小鳥とばら」「黄色いスカーフ」「ふしぎな文房具屋」「秋の音」「ききょうの娘」という、いずれも花にまつわる物語が収められています。どの作品もあかるところとくらいところが背中合わせのようになっていて、読んでみると、ぽつんとひとりになり、ふわりとした色彩や香りの中で、ころがらおどったり、波だったり、しずかになつたりします。美しい日本語が織りなす「日常のなかの非日常感」を、何度も繰り返し味わいたい一冊です。

この本を、学内で所蔵しているかどうか OPAC で検索してみました。所蔵本はありませんでした。このような場合は、「国立国会図書館サーチ」(<https://ndlsearch.ndl.go.jp/>)を使って、近隣の図書館に蔵書がないか探すことができます。本のタイトルで検索し、該当図書を選択して表示された画面の「図書館で読む」から「所蔵している図書館を見る(全〇〇館)」をクリックすると、この本を所蔵している全国の図書館を知ることができます。『花のにおう町』は、当大学の近隣ですと、名古屋市図書館、愛知県図書館、岐阜県図書館、三重県立図書館等が所蔵しています。興味を持たれた方は、ぜひ読んでみてください。

さて、蔵書検索といえば、前述しました学内のキンモクセイの香りに誘われるかのように、この秋、私はふと思いついて、当館の OPAC に、何気なく「キンモクセイ」という言葉を入力してみました。すると、検索結果に表示された図書があり、そのうちの1冊が、楠元図書館の1階に所蔵がある、重松清著『少しだけ欠けた月 季節風 秋』(文藝春秋社/2008年)という本でした。興味をひかれて請求記号913.6/601を頼りに探しに行ってみますと、書架の最下段で待っていたこの本は、心にしみる秋の情景12編を収めた短編集でした。ここに収められているのは、「オニババと三人の盗賊」「サンマの煙」「風速四十米」「ヨコヅナ大ちゃん」「少しだけ欠けた月」「キンモクセイ」「よーい、どん!」「ウイングボール」「おばあちゃんのギンナン」「秘密基地に午後七時」「水飲み鳥、はばたく。」「田中さんの休日」という物語。読んでみますと、どの物語にもそれぞれに人生があり、ぎゅっと心を掴まれて目頭が熱くなり、1編を読み終えたとしばらくその余韻に浸りたくなるような密度の濃い作品ばかりです。この中の「キンモクセイ」という物語が、今回の蔵書検索にヒットしたことで、私はこの短編集と出会えたのでした。



『少しだけ欠けた月 季節風 秋』

重松清/文藝春秋社/2008年

「キンモクセイ」は、思い出の借家から引っ越す家族の一日を描いた物語。認知症の症状が出はじめた父親と、その世話を一人では負えなくなった母親が、主人公「僕」の妹の家族と一緒に暮らすことになり、住み慣れた家を離れる日が来ます。

「お父ちゃん、さっき、がらーんとした居間を見て泣いとった」

「うん……」

「どこまで昔のことを覚えてるんか知らんけど、懐かしそうな顔して、泣いとった」

「そうか……」

つい沈んでしまった僕の相槌をあわてて引き上げるように、芙美は「お兄ちゃんも泣いたりせんといてよ」と笑った。

だいじょうぶだよ、と僕も無理に笑い返す。(中略)

「庭のキンモクセイ、昨日まではそうでもなかったけど、今日は朝からええ香りしとるよ」(「キンモクセイ」本文より)

家の長男である主人公は、すでに実家を離れて東京のマンションに妻子と住んでおり、両親の介護を妹家族に任せることに感謝と申し訳なさ、長男としての無力さを感じながら、実家から荷物を運び出すのを手伝います。子どもの頃に大好きだった本(『世界の童話』の『カロリーヌ』シリーズ)、父とキャッチボールした大小のグローブ、初めてのオーブントースターや花柄の電子ジャー……時代を感じさせる懐かしい品々に触れながら、この家のかつての情景や家族の記憶に思いを馳せる主人公と妹、そして父は……実家で最後の一日に、庭のキンモクセイの香りが寄り添い、ラストの主人公の目につくキンモクセイの描写がせつなくも美しい物語。「キンモクセイ」に導かれて出会ったこの本は、重松清さんの「季節風」シリーズの最終巻で、シリーズがこの「秋」で終わっていることも何だか素敵です。シリーズ全て楠元図書館で所蔵していますから、四季折々で季節の短編を味わってみてはいかがでしょうか。(胸のなかのバイオリンを愛する司書)